

## 古酒屋孫次（孫次郎）について

安政年間刊行の加賀技芸者番付に東の大関に大野の弁吉、西の大関に本吉の孫次とある。

古酒屋孫次郎は肥前伊万里で生まれ、はじめ友次郎といい陶画を学んだ。天保初年、生母の再縁先である本吉（現 白山市 美川）の古酒屋孫左衛門の養子となり、名を孫次郎と改め、伊万里より白磁を取り寄せ、金彩赤絵付に取り組んだ。特に七賢人、七福神、百老等人物画を得意とした作品には、「古孫」、「永昌」、「末成」、「本吉製」、「福寿」と記されており、作風は大聖寺の飯田屋八郎右衛門に似て、鑑別に苦しんだとされているが、その線の細さと豊かさはまさに孫次郎独自のもので芸術的なものである。

本吉の住人となって6年、伊万里赤絵の工人としては芸術的にも周囲から高く評価されていた孫次は当然のように九谷会社に監督として招かれ、指導者としても製作者としても活躍していたのである。古酒屋孫次は天才的陶工であっただけでなく、その指導力を発揮して多くの陶工をも育て、しかも独創的な九谷赤絵を確立したずば抜けた芸術感覚の持ち主であり、教師でもあった。門下に後世の陶芸界で活躍した松屋菊三郎、鍋屋栄吉、九谷庄三等の名工がいる。

孫次郎は孫次とも呼ばれていたようだが、これは通称、号であり、本名は孫次郎であったと「美川町史」に掲載されている。「九谷定本」には「安政末に歿す。年50余」とあるが「美川町史」には明治9年頃、小松泥町丙44番に居住したとあり、その歿年も定かではない。